かくれがま

園田明男

行くなと言われると、覗いてみたくなるのが人情だ。

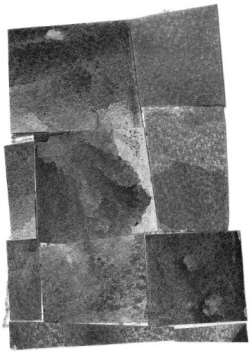
建脇謙三郎、為吉、耕作たち三人は、夕方大人たちが穴に行く様子を、山の中腹に隠れて覗いていた。

「俺たちには泥棒が住んでいるから決して行ってはならんと言っているくせに、オッチャンたちは何のために穴ん中に入っていくんか、分からん」

「あっ、チャン(父)が来た。おぉ、カン(母)も来た。ワッゼェカ……ナイゴッジャロカイ(何事だろう)」

「声が太っとか、聞こゆっど、ほら。がらゆっど(怒られるぞ)」

しかし大人たちは、子供たちが覗いていることには気付かず、藪椿の生えている判りにくい穴の入り口に速足で消えた。



「穴ン中タイ。それに水の音も喧(やかま)しかけん、俺たちの話し声は聞こえんバイ、チャンたちには」

確かに谷川の水音は大きくはないが、人々の話し声をかき消すには都合がよかった。役人に判らないように此処の盗人穴は川の傍にあったのだ。

「チャンたちはあそこでなんばしよっとじゃろかい」

「なんか、聞こえるバイ。低い声で歌っているごつある。歌の練習じゃろかい」

「穴ン中で、歌の練習など、すいもんか(するものか)。そいにしても、確かに歌を唄っているごつある」

耳を澄ますと、川の流れと共に遠くで蟬が鳴いているような音が聞こえる。

それは一向宗(現在の浄土真宗)の信者である村民の、阿

弥陀経を一心に唱える読経の声であった。穴は役人に判らないように入り口は狭いが、中は十人ほどの人間が座れるよう工夫されている。奥に高さ一尺程度の阿弥陀如来像が置かれていて、村人たちはその小さな仏像に向かって、日頃の苦しい生活を忘れるために経を唱えているのだった。

時の政権は、一向宗を厳しく取り締まっていた。彼らは政権に対し敵対していたわけでもないのに、なぜ弾圧されるのか分からなかった。

相手は侍で、盾突くとダンビロ（太刀）で切り殺される恐れがある。百姓が政権に文句を言うことなどできる時代ではなかった。彼らからすると百姓は虫けら同然の存在なのだ。作った農作物は殆ど搾取され、表向きは食うや食わずの生活。心の安らぎなどあろうはずもない。

穴の中に入って阿弥陀経を唱えている時こそ、だれにも邪魔されることなく安心できる一時であった。阿弥陀経の意味が解っている村人は少なかった。言ってみれば歌を唄っているようなもので、有難いお経を唱えていれば、苦しい生活を忘れることができたのだ。

心の平穏こそ自分が求めている安堵感がそこにあった。

政権に対しては、できるだけみすぼらしく生活しているように見せかけ、苦労していることを強調していた。実際は海が近くにあり、山野には食べられる草や時期になるとイチゴやムベ、アケビなどが実った。川にはテナガエビやモズクガニ、捕まえるのは難しかったがウナギなども捕れた。

海岸に行けば、穴にへばり付いているトコブシやイセエビさえ取れた。役人に見つかるとうるさいので、日が昇る前に出かけて獲物を捕って、足早に帰った。煮るための海水も、孟宗竹で作った水筒に汲んで帰った。

南別府城から監視の侍が来た時のために、食事の時は納めてはならない傷物や小さな芋などを細々と食べていた。着るものも、できるだけみすぼらしく見えるように継ぎ接ぎだらけの単衣を着ていた。

しかし監視人が木戸を開けて帰ったことを確かめると、囲炉裏の灰の中に埋めて隠してあったご馳走を家族みんなで食べた。実態は監視役の武士たちよりも、栄養のバランスの取れた美味しいものを食べていたのだ。そのことがバレないように工夫するのが難しかった。したがって朝起きても決して顔は洗わない。もちろん髪も梳かさず、時には竈の煤を顔に塗ることさえあった。

しかし、どうしても隠し切れないこともあった。それは次から次へと子供が生まれることだった。

「どうしてお前の処はこんなに子供が多いのだ」

ある時、監視の侍が聞いた。

「そりゃもう、収める芋ができるだけ多くとれるようにということで、人手が多ければその分多く仕事ができますので、ハイ」

と嘯(うそぶ)くのであった。

「そうか、貧乏人の子沢山とも言うしな。いい心構えだ。頑張って仕事に励んでくれよ」

「ヘイ、アリガトごいす。お侍様に褒めていただけば、そいだけで元気が出ますだ。アリガトサンです」

木戸まで見送りに出て、しばらく手を振って彼が再びこちらに来ないことを確かめてから、囲炉裏端に戻り、灰の中に埋めてあった朝方取ってきた大きなトコブシを掘り出し、灰の中で程よく蒸しあがった香りのいい貝を家族全員で食べた。

「ん〜まかねェー」

彼らはこのご馳走を「隠れ焼き」といって食べていたのだ。武家社会に盾突く方法は、できるだけ解らないようにカモフラージュすることが必要なのだ。分かれば確実にいじめられる。下手をすれば刀で切り殺されることもあるのだ。

隠れて彼らを煙(けむ)に巻く。カクレガマで念仏を唱えるのも同じことなのだ。

薩摩藩の一向宗に対する弾圧は室町時代から始まったと言われている。なぜ幕末を経て明治九年までの長きにわたって弾圧してきたのか。おそらく織田信長の時代に一向宗から攻撃を受け、怒った信長が数千人を殺害した時代を薩摩の政権は見据えていたのだろう。たとえ平民であっても数が多ければ油断はできない。常に監視している必要があった。数の多い彼らが暴徒と化し、怒り狂った彼らから攻撃を受ければおそらく数の多い彼らを打ち負かすことは難しい。刀は持っていなくても、それに代わる鎌や柄の長いナタ鎌などで立ち向かわれると、充分に武士の刀に対抗できる。農具の刃物は常に使用し、それに比べ象徴にすぎない武士の刀は使い慣れていない。対抗するには不利だ。特に農民が使う鉈鎌(なたがま)は柄が一間近くもあり、しかも彼らは仕事で常に使っているため尚更だ、と。

「チャンたちはあそこでなんばしおッと、泥棒穴だと言っているけど、おいたち（子供）には分からん、納得でけんバイ」

「あんまりそげんことを言ってはならんぞ。知られたら、俺たちが危なかケンな。下手をすると切り殺されることもあっとぞ」

「泥棒穴というからには、中に泥棒が住んでおっとナ。チャンたちと泥棒たちにはどういう関係があっとナ。さっ

ぱり分からんバイ」
「分からんでんよか、今日のことを決して人に言ってはならんぞ、役人に知れたら大変なことになる。分かったな」
「言っている意味がよく分からんバッテン、人には話さんほうがよか、役人に知られたらどげんことになるか分からんタイ」
「殺されるかも知れんとよ」
親たちが穴から出てくる前に、ここを離れなければまずい。見ていたことがバレると何をされるか分からない。家に帰って言いつけられた仕事をこなさなければ怒られる。
家といっても彼らの住まいは侍の住宅と比較して掘立小屋にかやぶき屋根という粗末なものだった。布団などなく、藁の上に着古したボロを被って寝るばかりだった。しかしこの辺りは地理的に南であり、寒さに凍えるということもなかった。子供たちはその粗末な家で楽しい夢を見ることができた。気温が高いということは有難いことだった。
村人の七割が百姓で、三割が武士だった。百姓は主に芋を耕作り、士族は近くの南別府城に通って仕事をしていた。城といっても平屋で、そこは小高い丘になっていて海が見渡せる。アジア大陸と繋がっている朝鮮半島が近いため、其処から密航船など海上の様子を監視するのが主な仕事だった。
薩摩半島は海抜千メートルの開聞岳があるため、この山を目標に海賊船や様々な船舶が、主に夕方から朝まで闇に紛れて横行していたのだ。
「もうじきチャンたちが穴から出てくるぞ、その前にここから逃げんと、がらゆっど（叱られる）、ほら」
彼ら三人の子供たちは、穴の中にいる大人たちに分からないように坂の道をそっと離れた。
普段親たちから、カクレガマには決して近づくなと釘をさされていたのだ。中には泥棒たちが住んでいて、見つかると何をされるか分からないということだ。煮て食べられるとまで言われ脅かされているのだ。
しかし子供たちにしてみれば、そんな悪い泥棒たちとチャンたちはなんで交流があるのか、納得がいかない。秘密があるに違いないのだ。穴の中で彼らと何をしているのか、どういうふうに泥棒たちと話し合っているのか知りたかったのだ。
ある時そのことを確かめたくて、大人たちが家に帰った後、本当かどうか様子を確かめようと思い、川向こうの穴の様子を窺ったことがある。盗賊がいるとすれば何をされるか分からない。下手をすると危害を加えられる恐れすらある。意を決して見ていたが、どうも人の気配はない。だ

とすれば、どうして大人たちは子供の我々に嘘をつくのだろう。川向こうの洞穴は静まり返っている。

「穴を見てみっが」謙三が言った。

「うんにゃ、行かんほうがよか。万一、中に賊が潜んでおれば、何をされるか分からん。あんなか（危ない）バイ」

皆は為助の言葉に従い、その場を離れた。

山の斜面には春の気配が漂い、芽吹き始めた木々たちは新芽の葉を風にそよがせている。孟宗竹の根元にはタケノコが顔をのぞかせている。南国とはいえ十二月から二月までは北西の風が強く、寒気が厳しい。この三か月間は、ろくに着るものもないため寒さに震えて暮らすしかない。暖かくなる三月頃になると子供たちにとって待ちに待った有難い季節になる。

大人たちが穴の中で訳の分からないことをしていても、子供たちにしてみれば文句を言われるわけではないので、あまり気にする必要もなかった。今日ここに来たのは子供たちの好奇心以外のなにものでもなかった。

この地域には川がないわけではないが、谷が深く田圃を作るには不向きな土地のため、米は陸稲しかなかった。農作物の殆どが唐芋（サツマイモ）に頼っていた。春先、芋を植えるための苗床を作り、種芋から発芽した芽を切って畑の畝にささなければならない。唐芋はさし苗で栽培するのだ。

百姓の仕事は朝から晩まで働きどおしで、時期になると次から次へと仕事が待っている。子供たちも親に交じって一日中畑仕事しなければならない。年少者とはいえ、農家にとっては貴重な労働力になっているのだ。

子供といっても仕事の速さは大人たちに負けない。十代になると親たちよりも仕事を熟（こな）すようになる。したがって発言力も増してくる。農耕馬を使うこともできるようになる。馬には名前などない。しかし動物といえども人間と同じ生きもので感情がある。使い手が子供だと馬鹿にして言うことを聞かない。

馬の主な仕事は畑まで行くための肥料や道具運び、収穫した農作物の運搬、畑を耕すための専用の鍬を引く仕事など多岐にわたる。畑の行き帰りには大きな舵輪の車を引かせる。木製の車で接地面に鉄の輪がはめられた直径五尺近くもある二輪の車を、専用の鞍を取り付け引かせるのだ。堆肥や収穫した芋を満載にすると可成りな重さになり、馬にとってもその馬車を引くことは重労働だ。

畑に行く時、謙三は馬と一緒に行く。馬車を引かせて行くのだ。上り坂がきつく、馬がしばらく動かないものなら、ムチで叩く。

芋の収穫期の秋になると、帰りは車に芋を満載して帰る。

芋を積むと重い。芋車を引かなければ尻に鞭が飛ぶ。馬も棒で尻を叩かれるのは嫌なのだ。餌を貰っている手前、逆らうことはできない。それに撓(しな)りのきいた竹で叩かれるのは絶対ごめんだ。図体の大きい割に馬は気が小さい。尻を叩かれたり大きな声で怒鳴られたりすると大げさに嫌がる。

「おい、今日は向かいの畠の土返しをやるからな。気合を入れてやらんにゃ、夕方まで終わらんど。終わるまで帰さんからなぁー。分かったか馬鹿たれ」

馬小屋から馬を引き出しながら、話しかける。名無しのごんべぇ馬は、

「フン、おめぇに馬鹿と言われる筋合いはない。人間だからといって、でかい顔をするんじゃねえ、ガキのくせに」

馬だから言葉は話せないが、多分このように呟いているに違いない。

馬の背中に馬車を引くための専用の鞍を載せ、それに車を取り付ける。畑を耕す大きな鍬(すき)も積みこみ、自分もその荷車に乗り手綱を握る。もう片方の手には竹のムチも持っている。言うことを聞かないとその青竹で尻を打つのだ。

畑までは橋のない加治佐川を越え、坂を登りきったところに目的の畑がある。登坂になると馬は一所懸命車を引っ張っているのに、気合を入れるという意味で尻を叩かれる。足が折れるほどに踏ん張り、頑張っているのに、なんでこんなに叩かれなければいけないのだ、こんなクソガキに……とでも思っているか。

ようやっと坂の頂上に着いた。畑まではあと一息。ここで一息、小休止だ。馬は歩くのをやめ立ち止まる。体からは汗が滝のように流れる。その匂いに釣られて血を吸おうとアブがやってくる。馬にはアブ除けのために腹掛けをしているが、奴らはそれをよけて血を吸いに来る。馬は伝家の宝刀の長い尻尾で、うるさいアブを叩き落す。夏が近いわけではないが気の早い春蟬が鳴いている。奴が鳴きだすと、かったるくなる。有難いことに風があるため心地よい。馬は足元の青草を食べた後、あと一息の畠まで歩かなければならない。

馬も自分が行く畠の場所は知っているため、黙っていても連れて行ってくれる。馬は車に乗せてある鋤(すき)を見て、今日自分がやる仕事もよく理解している。クソガキに手綱を握られ、芋を植えるための畑の土を、怒鳴られながら鋤を引っ張って耕すのだ。

仕事が終わって帰り道、加治佐川まで来ると荷馬車をはずされ、川の水で体を洗ってもらえる。帰れば一日一回のご馳走のニゴシ（クズイモや芋の葉っぱを醤油カスで煮た餌）が待っている。これを食べる時が馬にとって一番の幸せな時なのだ。そのほかの餌は、春から秋にかけては野の青草、

冬は草が少ないため陸稲を乾燥させたあまり旨くない餌だ。ニゴシの時間は七時頃、少しでも遅れると馬小屋の壁を蹄で蹴飛ばして、早く持ってくるように催促する。ニゴシのご馳走を食べた後は横になって休む。

建脇謙三郎の家は士族（侍）だ。為助と耕作の二人は百姓で苗字はない。

士族といっても健三郎の家は、苗字の無い百姓たちと何ら変わりはない。下級武士は貰っている食い扶持が少なく、それだけで生活していくことなど到底できない。食べていくためには百姓と同じように畑で作物を作らなければ生活できない。苗字と太刀を与えられても、食べて行くためには役立たないのだ。平民と違って戦争になれば戦に駆り出され、彼らより分が悪い面もある。

藩は士族という名目だけ与え、自分たちが都合のいいように工夫してあった。薩摩国は他と比較して士族が多い。米一俵でも貰っていれば藩の命令に従わなければならないのだ。戦になった時、兵士が多ければその分有利になる。数が多い方が戦略上戦いやすいことを藩は熟知していた。

昔、島津氏が薩摩国を奪い取る時、彼らは知覧氏と戦い知覧国を奪い取ったのだ。種子島に知覧という苗字の人が存在していることを考えると、そのことが理解できる。戦いに敗れて種子島まで逃げ延び、そのまま現在に至っているのだ。

隣の川辺（かわなべ）氏にしても同じで、地元から川辺の士族を追い出し、地域住民との交流を絶った。追い出した先は山奥だった。現在でもその子孫が山奥の同じ場所に住んでいる。

健三郎は鞍をはずし、馬を小屋に入れると刈り取ってきた青草を藁切で刻み、馬に与えた。馬は鼻を鳴らしながら餌の草を食べる。次はニゴシを煮なければならない。窯小屋に行きクズイモと芋の葉、醤油カスを大きな専用の鍋に放り込み、水を入れて火を点けた。一時間ぐらいでニゴシが出来上がる。

建脇家は屋敷の地面に埋めてあるこの地方独特の大きな水瓶（みずがめ）に、加治佐川から天秤棒で水桶を担ぎ、巨大な焼き物の瓶（かめ）に水を汲み置き、生活水として使用していた。瓶に満杯に水を入れると、桶（現代に直すと大きなバケツほどの大きさ）に三十杯は入る。

健三郎は馬の餌が出来上がると洗い桶に水を汲み、真っ裸になって汗を流す。贅沢な風呂などないのだ。田舎の夜は一寸先も見えない暗闇だ。したがって女性でも裸になっても恥ずかしくない。専用の三本足の洗い桶があり、寒い時期はお湯にして体を拭く。

脱ぎ捨てたボロの野良着は母親が加治佐川で洗濯し、河

原の草むらに干しておく。畑仕事の帰り、継ぎ接ぎだらけの野良着は乾いた洗濯物として持ち帰られるのだ。

健三郎は一時期、「赤鼻の健」と揶揄われていた。乾いた野良着の匂いを嗅いでいた時、大きなムカデに鼻の頭をかじられたのだ。暖かい太陽の匂いのする乾燥した野良着を嗅いでいたら、中にムカデが紛れ込んでいた。ムカデの毒は黄色足長蜂と同じく強烈で、噛まれたらたちまち赤く腫れる。洗濯物を干す河原の草むらには、マムシやムカデなど毒虫も同居している。特にムカデは、居心地がいいのか衣服に紛れ込むことが多い。田舎での生活はムカデに噛まれる人が多いのだ。命を落とすわけではないが、激痛が走り痛い。

建脇騰慎は健三郎の父で、年間一石にも満たない食い扶持を貰う貧乏士族だった。士族とはいえ、この地方では百姓と変わらない貧しい武士が六割以上いた。母も襤褸を纏い、畑仕事や加治佐川での洗濯、貧しい食事作りに追われる女性だった。士族の家柄とはいえ百姓の家庭と何ら変わりはない。

建脇騰慎は士族でありながら、百姓たちと同じように、固く禁じられていた一向宗をひそかに信仰していた。このことが建脇家のその後の激変に大きく関わっていったのだ。

「殿様の要望に逆らうとは、何事か。百姓なら分かるばってん、禁じられている一向宗を信仰するということは、殿に尻を向けることなのだぞ」

「おいはそうは思わん、親鸞聖人の教えに感銘を受けているだけだ。お前らみたいに頭が悪く馬鹿な奴には分からんだろうがな」

「なに、もいづ度言ってみれ、食い扶持を貰っているのだろうが島津っどんに」

「一石にも満たない食い扶持じゃ、飯は食っていけん。見てみろ今日の昼飯も芋ばい、これじゃ力は出ん。出るのは屁だけだ」

「義を言うな、罰当たりが。聞いてみれ、西郷どんにがらゆっ（怒られる）とは当たり前ばい、この馬鹿たれが」

「ないば言うか、びんた（頭）ん悪いか田舎もんのお前たちに、ないが分かるか、アホ」

「なにぃ、まいっどゆんみれ（もう一度言ってみろ）、ただじゃおかんぞ」

論争はエスカレートして、ついには刃物沙汰になり、勝脇騰慎の錆が目立つタンビロ（太刀）が相手の左腕をかすめた。騒ぎは大きくなり、ついには城主より勝脇を捕らえよと命令が下った。

捕まれば命はない。建脇は籠街道を西へ逃げた。街道沿いに逃げても多勢の追っ手に追われれば逃げ果せることは

不可能だ。そう考えた建脇は途中、籠方面に走り左側の山の中に逃げ込んだ。しかし藪の中は棘(いばら)の樹が多く、手足に傷を負いながら逃げてもすぐに追いつかれてしまった。松の大木があり、建脇はこれを背に太刀を振り回し抵抗したが、人数の多い敵にかなうはずもない。左首すじの頸動脈に切っ先三寸の刃を受け、出血多量で即死した。

この事件があって、建脇家は生活が激変した。変わり果てた夫の遺体を見て妻の喜代は気がふれ、一月後には狂い死にしてこの世を去った。

建脇謙三が復讐の鬼と化したのは言うまでもない。父の戦ったダンビロを腰に、手には一間の鉈鎌が握られていた。一行を率いた奴の首をはねるためだ。必ず城主をこのダンビロで切り殺すと怒りを心に刻みこんだ。時は江戸時代末期、明治になる一年前のことだった。

親鸞聖人の教えに従い、南無阿弥陀仏と唱えていただけなのに、なんで命を奪われなければならないのだ。どう考えても自分たちの想いが間違っているとは思わない。母までも奴らに殺されたようなものだ。決して許さない。奴らを必ず殺す。

父の残した大刀を腰に、手には鉈鎌を握り、奴を切り殺すために建脇家から遠い城主宅の家を監視していた。必ずこのダンビロで奴の首を刎ねてやる。怒りの炎は頂点に達し、城主の家の周辺でうろつく建脇謙三の異様な姿に恐れをなし、周辺の村人たちは家の中からその様子を窺い、この先どうなっていくのだろうと怯えていた。

ある日、意を決して謙三は、城主宅の玄関を叩き壊し、屋敷に侵入した。しかし家の中に人影はなかった。謙三の様子を人伝に聞き、恐れをなした一家はこの家にはいなかった。人がいればすべてこのダンビロで切り殺すと決めていた。苛立った謙三はこの立派な家に火を放った。藁葺屋根の無人の家はたちまち炎に包まれ、それはまるで謙三が怒りの鬼と化し、怒り狂ったように炎は天を焦がした。

時は明治初期、この頃になると宗教弾圧の咎(とが)も解け、洞穴の中で経を読む必要もなくなった。それでも謙三は仲間を集め、士族の墓を壊し、彼らの寺に火を点けるように命じた。墓石は彼らの持ってきた大型のゲンノウで叩き壊され、寺には火を放った。寺の入り口には石像があり、彼らはこの門の左右に立っている仁王像も壊した。僧侶たちは命が危ないということで、這う這うの体で寺から逃げた。寺という寺はすべて火を点けられ、焼け落ちた。このようなことに関わったのは仲間だけではなく、長年頭を押さえつけられ、士族に支配されてきた農民の怒りで、総ての下層民が関わったのだ。